

# 人　ダ　ナ　カ　日　在

日本で活躍している十人のカナダ人をご紹介します。小説家、芸術家、禅僧、ピジネスマン、スポーツマン、茶人、サル研究者……と、いろいろな分野にわたっている。

日本に腰を落ちつけ、日本について勉強し、日本人と共に生活し、あるいは東西の架け橋として活躍しているカナダ人は多い。特に宣教師として来日し、教育その他の分野で日本人の国際化教育に貢献しているカナダ人は、枚挙にいとまがない。

最近では日本研究のために長期滞在する人も増えた。中には、「日本人より日本のことに詳しい」と言われる人もでてきた。北海道には、ラジオのディスクジョッキーをやっている人物もいる。紙面のついで、ご紹介したい多くの「在日カナダ人」を割愛せざるを得なかった。

## パメラ・アスキース

### 「サル学」を研究する人類学者

端山 文昭

日本のサルがはじめて世界の人びとに知られたのは、ざっと百四十年前のことである。紹介者は、日本がまだ鎖国の時代にあつて、世界に向けてたつたひとつの窓口をあけていた長崎・出島のオランダ商館付ドイツ人医師で、博物学者でもあつたF・V・シーボルトである。そしていままた、カナダの人類学者によつて、ニホンサルが世界の霊長類研究にあらたな展望を示唆しようとしている。

パメラ・アスキースさん、三十一歳。現在、京都大学理学部の動物学教室、伊谷純一郎教授（人類進化論）のもとで研究を続けている。来日してまもなく二年



アスキースさん

になる。彼女の研究テーマは、西欧と日本がそれぞれに長年取り組んできた「サル学」の文化的背景について比較、検討を加えようというものである。

およそ日本の科学は、医学をはじめとして、あらゆる分野を幕末から明治維新

にかけて西欧から一気にうけ入れ、その方法、テクニクを身につけ近代化を図ってきた。ところが、霊長類研究については、ことに第二次大戦後、まったく独自の研究をおこない、世界の霊長類研究者から関心をあつめている。

パメラさんの来日動機も、そのあたりの追究にある。

パメラさんはモントリオールで生まれ、トロントのヨーク大学で心理学、人類学を学んだあと、カナダのサファリ・パークで二年間、捕獲・飼育されたライオンの行動（ハンティング）について調べた。さらに東アフリカ・タンザニアに飛び、セレンゲティで野生ライオンを調査し、比較研究を行なった。一九七四年、英国・オクスフォード大学に入り、生物学、人類学、哲学を専攻、日本のサル学に関する研究で博士号を得ている。

生物はすべて社会をもっている——こんな概念をうちたてたのは今西錦司博士である。これは西欧の概念にはなかったもので、彼女の目に非常に新鮮なものとして映つたようだ。欧米におけるこれまでの生物の観察は、行動を解析してゆく、いわゆる行動生物学に重点を置いてきた。つまり、生物・動物にはもって生まれた性質があつて、そこから逃がれることができ